

【書評】

『今宵はなんという夢見る夜』

柏倉 康夫（著），左右社（2018.6）

中西 裕

NAKANISHI, Yutaka

Received: 2019. 12. 30

本書は、金子光晴(1895-1975)とその妻であった森三千代(1901-1977)の出会いから幾多の波乱を経て、2年違いで二人がこの世を去るまでの「道行き」を描いた評伝である。とはいえ、金子については、途中にその誕生や子供時代のことも挿入されているから、生涯全体を扱っているものと見倣してよいだろう。ポイントを落とした2段組、400ページを越える大著に収められた情報はとても多く、細部まで注意深く書かれている。みごとな構成力である。

詩人金子光晴は現代詩に大きな足跡を遺した巨星だが、私生活では奔放な女性関係が好奇の目で見られる存在でもあった。詩人たるもの、金子より10年先輩の北原白秋から、20年以上も後輩の『荒地』同人たちにいたるまで、同じ傾向を持ち、またそれが許される存在だったのではないかとすら、つい想像してしまいたくなる。その中でも金子が特に注目されるのは、夫人の小説家森三千代もまた同じように多情な女性だったからであろう。この二人の関係がおもしろくないはずはない。

二人ともが物書きだから、自分たちについて書き遺したものが豊富にある。もっとも、二人がそろって作家だから虚構も混入する。それらを存分に使い、「合わせ鏡として参照することにより、金子の「自伝」が含む虚構の部分を照らしだすことができる」(p.7)。

比較研究法は、『古事記』と『日本書紀』の二つの矛盾から日本古代史が構築されるように、どの分野でも真実に迫るに有効な方法であろう。同じことについての記述を見比べると必ず矛盾が出て来るものだ。その矛盾をどう捉えるか。凡百の知性では常識的な結論しか出て来ない。その判断が極めて難しいのもまた事実。この点、手練れである著者の筆であれば、安心して読むことができる。

まずは、二人の記述の違いから日付の誤りが指摘されている。二人がヨーロッパへ旅立った日付について、金子は『詩人 金子光晴自伝』では昭和3年9月1日と記している。ところが、この日付は三千代のメモを使って6日に訂正される(p.79)。この点は著者の創見ではないようだが、それを追証する形となっている。

金子がパリに着いた駅を東駅と記している『ねむれ巴里』の記載について、南から来る

列車はリヨン駅に着くとの指摘 (p.159) は、さすがにパリの地理をわがものとする著者ならではである。三千代が滞在したホテルを金子が探し当てた件についても、内容の混乱を指摘して、彼がホテルを訪ね歩き、探し当てたことを明らかにした (p.140)。

金子から、恋人になってくれないかと迫られてためらっていた三千代に、承諾しないなら、こうすると、詩集『水の流浪』の原稿を書き込んだノートを真ん中から引き破ったという、人口に膾炙したエピソードも、三千代の証言では、「ノートを川へ放り込もうとするんです」とだけある。著者は、これは江戸川べりでおこったことと考えられるとし、「金子の『どくろ杯』の記述は多分に修辭的である」と断じている (p.18)。破ったとはフィクションであると教えられた。それぞれを読む際には何気なく読み飛ばしてしまう記述も、比較すると見えてくる真実がある。著者の判断は妥当だろう。

金子と三千代の資質の違いを詩人と小説家としての存在の中に見る批評 (p.52) も、作品の一節を比べて見せてくれることで首肯できる (p.52)。

＊

金子と三千代に関しては、第三者の証言が豊富に存在する。それらをどう採り入れて、どう解釈するか。この点も史料の少ない古代史を研究する場合と史料豊富な近現代の事象を相手にする場合とでは違いがある。

結論から言えば、著者は、第三者の証言を採用することには極めて慎重であり、禁欲的であるように見える。金子夫妻と、二人の間の子息である森乾『父・金子光晴伝——夜の果てへの旅』以外の証言は原則として採用しないとの立場を固く守っているように見える。

この方法は成功していると言うべきであろう。ただでさえ世間をにぎわすゴシップを必要以上に追っついては、二人の関係の真実を見落とす結果になることは目に見えている。その危険を避けたことは賢明な選択だった。

世俗的な興味を喚起しやすいテーマと言え、大川内令子と金子との関係がある。「ラブレター」のタイトルで、関根恵子をヒロインにした映画も作られた。江森陽弘がその大川内の聞き書きをまとめた『金子光晴のラブレター』でも使ったら、いくらでも一般の興味を引く本ができてしまうだろう。その例としては、桜井滋人の『恋兎——令子と金子光晴』が思いつく。

しかし、著者はそのような手段は一切採らない。大川内への聞き書きおよび、それをまとめた図書の出版に当たっては、森三千代の許可を前提としていた。三千代は「大きな心、暖かい心」をもって発表を許可し、実現した企画だった。しかし、著者はこの証言にはまったく触れずにすませている。それを禁欲的との言葉で表現したくなったのである。

その意味で、著者の筆は、むしろ淡々と、この稀に見る関係を維持した夫婦の在り様を描いて見せている。静かな筆致だからこそ浮かんでくる真実の姿がある。

いっぽうで著者は二人の遺した記録だけではなく、他の文献も実は広く渉猟していることが垣間見られる場面もある。例えば、小池真理子の「金子は女性に魅かれ、女性なしでは生きられなかったにも関わらず、女性が持っている即物的な性、動物的な側面を目いつ

ばい嫌悪していた」云々といった評価を紹介した。ことに事実関係以外の面で、広く目配りをして他者の評言を援用していることが知られる (p.287)。

詩集『鮫』の未完のゲラ刷を引用した赤松月船の批評と、のちの人民出版社版とを丹念に比較して、推敲・修正を指摘するなど、丁寧な研究がなされていることも窺^{うかが}える。

＊

本書には多数の詩が引用されている。その点でも、金子光晴、森三千代の作品を知るうえで便利である。中でも、森三千代の詩、特にフランス語詩集『POÉSIES INDOCHINOISES』（詩集インドシナ）を紹介しているのが得難い。この詩集を初めて紹介したのは牧羊子で、その著『金子光晴と森三千代—おしどりの歌に萌える』においてのことだったが、本書では、牧が訳さなかった作の中から選んで、著者自ら訳すという細かな配慮がなされており、その点での価値も高い。

反戦詩人、抵抗者としての金子の成長を語ることも本書の幹であるはずだ。若いころに書いた詩（その一節には「人のいやがるものこそ、僕の好物、／とりわけ嫌ひは、気の揃ふことだ」とある）を引用して、著者は「これらのごく初期の作品に、後年の詩人金子光晴の本質——天邪鬼の反抗精神——が鮮やかに刻印されている」と記す。

しかし、著者は次のようにも記している。「金子はもともと感覚的な耽美主義者で、思想は苦手だった。それに三千代の恋人だった土方の存在もあって、左翼思想に対して懐疑的だった。その彼がこの旅で植民地の実態にふれ、さらに長尾の影響もあり、次第に白人の植民地支配に対して怒りと批判を持つようになっていた」(p.118)。

この指摘を読んだときには、十分には腑に落ちなかったのだが、後の方で、1935年に発表された詩「鮫」で批評としての詩を金子は自分のものとしたと著者は述べ、その詩もシンガポールで発想されたものだと言われている (p.269)、なるほどと膝を打つことになった。

もちろん、金子は著名な詩「おっとせい」の一節で「むかふむきになつて／おっとせい」と書いて自分自身を痛烈に批判する (p.275)。また、息子乾の徴兵を逃れさせるためにあらゆる手段を使った、世によく知られたエピソードにも詳しく触れている。

徴兵逃れについては、乾自身が良心的兵役拒否をしたわけでもなく、親である金子の自己中心主義だとする批判もある。また、金子が本当に反戦主義を貫いたかどうかについては夙^{つと}に異論が出されてもいる。前田均は『少年倶楽部』別冊付録所収の金子の一文、「見よ、不屈のドイツ魂」を発掘して、単純に抵抗詩人としてだけ金子を見てはいけないとの視点を提示した。この点については、著者は特に議論に深入りすることを避けているように見え、それもまた慎重で妥当な判断だと思える。

＊

さて、書評においては長所とともに欠点も挙げるのが、お定まりのやり方になっている。その慣行にしたがってみよう。本書には、やや脱字・衍字^{えんじ}・誤植が目につくようで、例え

ば、照国丸の船内装飾の^{まきえ}蒔絵が「益田権六」によってほどこされていたと書かれているが（p.214）、これは「松田権六」ではないだろうか。また、ホイットマンの著書が『草の花』になっている（p.27）など、少々気になった。これらは編集の問題と言うべきか。

ただ、p.401 の上段、「僕は戦争に協力していないと同じだったのだ」と金子の文を引用したのは、前後の文意が通らない。中央公論社版の全集で確認してみたら、「僕は戦争に協力していたと同じだったのだ」となっていた。直前の部分にも引用の際に欠落が生じている。初出誌であるはずの『コスモス』1950 年の該当号までは確認できなかったが、全集に合わせて訂正を要するだろう。

もうひとつ、著者の誤記ではなく、金子が書いたものが間違いのようなのだが、ルパン物の『虎の牙』が紅玉堂書店から発行との記述について（p.44）、どうやらこれは大正 15 年 2 月に金剛社から刊行された（<https://jyunku.hatenablog.com/entries/2011/10/09> 2019.12.30 閲覧）『見えざる怪魔』（<http://www2s.biglobe.ne.jp/tetuya/lupin/tigre1.html> 2019.12.30 閲覧）とするのが正しいようである。

と、あげつらったものの、これらはごく小さな傷であり、慣行にしたがったまでのこと、本書の価値はゆるがないのはもちろんである。金子光晴、森三千代、森乾の三人の不思議な関係について堅牢な一冊が書かれたことを感謝するとともに^{ことほ}寿ぎたい。

【詳細情報】

『今宵はなんという夢見る夜一金子光晴と森三千代』

著者：柏倉康夫

左右社、2018 年 6 月発行、411 頁 四六判 並製

装幀：林哲夫